

中国語教育学会会報

第1号(通巻26号) 2002年6月18日発行

下記事務局へのご連絡は郵便で

中国語教育学会
東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部中文研究室
郵便振替口座 00110-1-191152

中国語教育学会として初の会報をお届けする。3月27日に開催の全国中国語教育協議会で、中国語教育学会への移行が議決され、前号を以て協議会としての会報は最終号とした。協議会の会員に中国語教育学会への継続参加の意志確認をしたところ、140名の方から参加のお返事があった。不参加のお申し出は14名で、ほとんどは現職を退かれたり、海外に長期滞在の方々であった。他の会員からのお返事はないが、おたずねの葉書に返信なき場合は継続の扱いにさせていただき、記してある。中国語教育学会の発足にあたり、日本中国語学会の会員で、現在、本会に未加入の方々に入会のご案内をお届けすることにした。遅くも夏休み前には1,000通近くを発送する。この作業を待って本格的な学会活動が始動することになる。

中国語教育学会 会報・研究ファイル 原稿募集

会報掲載原稿 ①教室での工夫・授業のアイデアなど
②教学実践記録(教案なども含む) ③国内外の中国語教育・研究関係学会・研究会・シンポジウム紹介 ④私の読んだ本(外国語教育の分野で、紹介・書評など) ⑤その他、会報にふさわしい内容の原稿。1編1,000字以内。ワープロ使用を原則とする。手書きの場合は400字づめの原稿用紙使用。締切りは特に設けない。採否は事務局に一任とし、随時掲載。原稿は返却しない。

《研究ファイル》原稿 会報(年間5~6回発行)とは別に、とじこみ式の「研究ファイル」を不定期に刊行する。中国語学、中国語教育に関する研究論文や外国語教育に関する主張・論説を歓迎。字数は400字づめ原稿用紙に換算して20~40枚程度。形式については既刊のファイルを参照のこと。投稿は理事若干名の審査で採否を決定。原稿はワープロに限り、用紙に印字したものにフロッピーを必ず添付する。ファイルの形式はWindowsで作成されたものとし(Mackintoshは不可)、できればMicrosoft Word文書ファイルが望ましい。中国語はGB、またはBIG5で入力されたもののほかに、「Chinese Writer」「Nihao Win」「cWnn」「中文起稿」等も可。随時受け付け、個別に刊行。

以上は基本的に中国語教育協議会の方式を踏襲。
今年度から別途に学会誌を発行の予定。次号で予告予定。

SSS事務局だよりSSS

〇前年度の協議会の活動で積み残した「研究ファイル」No.4刊行。この会報とともにお手元に。大遅延を執筆者にもおわびする。審査をされた理事のなかには詳細なコメントをしてくださった方もあり、執筆者には修正の参考にしていただいた〇〇教育学会への移行は果たしたが、事務局はしばらく現状維持。折からの新学年繁忙期、あれこれ処理の遅れがちのところ、植村会員から「義務労働」の申し出あり感謝。このほか、林原会員から切手の提供、退会される吉田実氏をはじめ、ご寄付もいただいた〇〇暫定的な学会活動として月例セミナーを再開。会場の都合で定員30のところ40名の申込があった。当面続行していくが、7月以後と、今後の活動計画については本号p.4をご参照いただきたい。

どの言語にせよ、話しことばと書きことばの間にはへだたりがある。日常の対話でコミュニケーションに使われる語彙や表現が、すべてそのまま読んだり書いたりする書きことばになるわけではない。しかし、このへだたりが中国語の場合には決して小さくない。中国には口語に対する文語の長い歴史があり、現代語の口語に文語の語彙や表現がなお生きている。五四運動以後、徐々に形成された、口語に根差す文章を書くにも、文語に根差す語彙や表現は不可欠の要素である。古代語を引き継ぐ文語文にせよ、現代語による口語文にせよ、それらの書きことばに対する話しことばの位置づけは、あたかも共通語に対する方言のようなものでさえある。いわば、時空を越えた書きことばは、中国語を話す人々にとって共通理解のために必要な存在である。したがって、外国語としての中国語学習には書きことばも対象とすべきであり、学習者は書きことばと話しことばのへだたりをも知っていなければならない。

書きことばと話しことばの問題について、とりわけ中級段階の中国語教育における留意点について、すでにロンドン大学の佟秉正氏が第5回国際中国語教育シンポジウムにおける報告で、きわめて的確な指摘をしている（第五屆國際漢語教學討論會論文選所収）。佟氏は、話しことばの学習だけでは商品の使用説明書や掲示・標識などに見る書きことばを理解できないばかりか、車内のアナウンスでさえ書きことばで定型化され、普段着の話しことばではないことを指摘している。佟氏も言うように、毎日の生活に欠かせない金額の表示では、貨幣の単位に話しことばと書きことばの双方が存在する。

母語として中国語を話す人々にとっては、このような書きことばと話しことばが平行することにさほどの困難はないが、中国語を学習する外国人にとっては大きな負担である。この場合、欧米人はおそらく話しことばの学習からスタートし、書きことばの障壁にぶつかることになるが、日本人は日本語に生きている漢字や漢語から、中国語を学ばなくても書きことばには一定の親しみと理解を示すことができる。むしろ話しことばの学習にそれらの知識が妨げにもなる。学習用の辞書などにはその傾向を助長するような記述もある。例えば、《新華字典》の“头”の項の挿図には“眼、耳、頬、口、眉、鼻、額”などの部位名称が記されている。いずれもこのまま話しことばでは用いることのできない、書きことばである。中国語学習者には“眼睛、耳朵……”などの話しことばを記してほしいものだ。日本人の学習者にとっては、これらの書きことばが、そのまま日本語で日常の基本語彙として使われていることが問題となる。2年前に出た《応用漢語詞典》では“眼睛、耳朵、鼻子、嘴”などは話しことばになっている。日本人学習者のために編まれた小著《中国語図解辞典》では、さらに“頬”を“腮帮子”、“眉”を“眉毛”、“額”を“脑门儿”と、そのまま会話で使える話しことばを優先している。中国の辞書の記述には書きことば偏重の傾向が見られるが、《新華字典》でさらに“体”の項を見ると、“肩、胸、腹、腕、肘、臀、股……”など、同様に日本語でそのまま使える、書きことばが並び、これらは《応用漢語詞典》も同じである。

日本人にとって、中国語の書きことばは話しことばより理解しやすい。極端に言うと、中国語を学んだことがなくても想像力や創造力に富んでいれば、ある程度は意味を推察できる。それは日本語のなかで中国から伝わった漢字や漢語語彙が使われているためである。日本人にとり、中国語の書きことばがどのような位置付けになるのかという事実を示す例として、

倪宝元《汉语修辞新篇章——从名家改笔中学习修辞》を見ると、多くの有名作家が自身の作品の文章に手を入れていることから、それらの書き換えを語彙面と文法面にわたって類型別、具体的に例示している。そのなかで、書きことばから話しことばへの書き換えによって、原文より平易な表現になる例を数多く並べているが、日本人にとってはむしろ原文の方がわかりやすい例が多い。例えば、巴金の作品《雷》で原文の“明晚”が“明天晚上”に、また曹禺の《雷雨》で原文の“父親”が“爸爸”に、茅盾の《子夜》で原文の“按在腹部揉摩”が“揉着肚子”、叶聖陶の《稻草人》で原文の“婴儿”が“孩子”、“给乳”が“喂奶”等にそれぞれ改められ、口語体の平易な表現になったとされているが、これらの例では、いずれも書き直される前の原文には日本語で日常的に使われる漢語や漢字が用いられ、そのまま理解できる。書き直された表現は、日本人にとってかえって難しい。また、同書で“濫用古語詞”とされた例に、“我的足”が“我的脚”に、“犬”が“狗”に、“沐浴”が“洗澡”に改められたと指摘するが、どの例も原文のままの方が日本語で使っている語彙である。

通常、中国語の学習は話しことばを対象とし、会話体で書かれたテキストを使用するから、書きことばについて断片的な知識は得られるとしても、総合的な知識と技術を身につけることは困難である。書きことばによる手紙や日記を書くことはできない。この点を考え、以前会話体の教科書を中国の先生に執筆していただいた時をお願いをして、ある程度の語彙と文型を習得した段階から、試みに各課ともそれぞれのテーマに従った対話の後に、同一テーマによる日記や応用文を配した。話しことばと書きことばの対比が具体的に提示できるだけでなく、例えば日記を書くという作業により学習者自身が書きことばに近づけるように図った（奥水優監修、許徳楠著《会話から読解へ》東方書店、1986年）。一つのテキストにおいて、あるいは一つのシリーズとしてのテキストのなかで、話しことばから導入し、日常生活における書きことばも、文学作品における書きことばも、話しことばとの段差を少なくして学ぶことはできないものか。このテキストはその試みをするものであったが、シリーズとして完成できなかったのも、その目的は達せられていない。文革後の体系的テキストとして広く使われて来た《实用汉语课本》は、全4冊のうち第3冊から「語法」の項目が消え、「詞語例解」の項目を設け、語句の運用法をはじめ修辞法に重点が移っているが、課文はなお基本的に話しことばに基づく文章であり、現実に日常生活で目にする書きことばには達していない。佟秉正氏が指摘するような商品の使用説明書に記された文体はこの段階でなお習得されていないことになる。「語法」から「詞語例解」に移った段階で、書きことばの語彙や文法への傾斜が必要であり、そのためにも語彙の色分けや、文型の選択などを的確に説明することが求められる。これらの点について、外国人に対する中国語教育でなお研究の欠落していることは否定できない。ネイティブ・スピーカーではない私自身には、そのような説明は困難な点も少なくない。例えば、文字改革にも従事されていた林漢達氏が、話しことばで文章を書く試みをした《前后汉故事新编》の序言には話しことばと書きことばの対照表が掲げられている。そのなかには、“将”を“把”とし、“时”を“的时候”と改めるというような例が列举される。初～中級段階のテキストにもこのような対照表が作成されることを望んでいる。日本人にとって、中国語の書きことばは話しことばより理解しやすいとしたが、それは日本語の漢語・漢字の知識に助けられてのことである。会話体のテキストに平行して、あるいはそれに続けて、一定程度は系統的に書きことばの把握をはかるために、テキストへの配慮を今後はさらに重視したい。

会費納入のお願い

中国語教育学会への移行にともない、新しい会則(2002.3.27議決)による年会費として、個人・団体を問わず5,000円を納入していただくことになりました。今回の会報と共に振り込み用紙をお送りしましたので、早めにご納入のほどお願い申し上げます。金額を記入していませんが、新しい会費は5,000円です。口座番号も新しくなりましたので、ご注意ください(00110-1-191152)。なお、全国中国語教育協議会の会費未納分もご請求いたしました。

学会の予算・決算について

これまで、全国中国語教育協議会では予算規模が小さく、事務処理能力も限られていたため、当初の理事会で収支の大枠を了承していただき、年度毎に会計監査を経て、理事会で審議の上、会報で決算報告(総会の開催年は総会で審議)をしていました。今回、教育学会への移行により、会員数も大幅に増え、活動内容と予算規模にも変動が見込まれるため、新体制が確立した段階(今年度後半の見込み)で会計関連事項を理事会の審議に付し、次年度以降は各年度の総会でご審議いただきます。

7月月例セミナーのご案内

前回6月のセミナーで報告者から副題とした「会話体テキストの限界」の部分拡大したテーマで次回も続行したいという提案がありました。今回は教科書についての討論会です。

7月ご案内

日時：7月13日(土)14:00~16:30

場所：国際文化フォーラム(新宿駅西口)

主題：『中国語テキスト縦横談』

6月の報告者(興水優会員)から「会話体テキストの限界」その他、中国語教科書の問題点について約60分の報告後、参加者にテーマに沿った自由発言をお願いし、討論。参加費不要。参加申込は葉書で事務局へ。定員30名で先着順。定員超過の場合はご連絡します。

学会の当面の活動について

これまでの毎月の活動の主力であった月例会は続行します。従来と同様に4~7月と9~12月の第2土曜午後を定例とします。ただし、これまでのようなセミナー一辺倒ではなく、討論会・座談会・研究報告・学習会など多様な形態を考えています。会員の研究発表も月例会で取り上げますので、お申し出ください。また、東京以外の各地で会場の準備だけしていただければ、「出前セミナー」や、報告会その他の企画を事務局の経費負担で実施します。お世話くださる方は随時、事務局にご相談ください。年度末の3月末には大会(研究発表会)を予定。投稿についてはp.1をご参照ください。会報と葉書で諸活動のご案内をいたします。

学会消息

第7届国際漢語

教学討論会が

8月2日~6日

上海市内の

千鶴賓館で開かれる。この

大会は3年に1度、開催される。



【会務報告】中国語教育学会移行にともなう会計処理

全国中国語教育協議会の平成13年度会計報告は、去る3月27日の総会で承認されました(前号会報)が、繰越金については中国語教育学会が引き継ぐことにいたします。

(繰越金)一般会計773,244円、月例セミナー159,542円。

セミナー興水講師謝金保留分は事務局諸雑費に寄付し、

今後の作業量増加による「お手伝い」の費用等に充てます。